

その夜、山奥の空は紺く澄みわたっていた。

「……っ、……」

橙 色のようにも見える濁った湯に、丁度脇下まで浸かった少年。

清々しい山村の空気に似合わぬ熱い息を、彼は人知れず飲み込んだ——。

遠くの湯口から源泉が供給される滝のような音。湯の甘やかな香り。洗い場のみを覆う屋根の梁に取り付けられたいくつかの電球だけが、頼りなく辺りを薄茶色に照らす。

「……っ……、ふ…、あ……っ……♡、」

少年の震える唇から漏れる息。抑えようとしても瘦身は小刻みに震え、湯のあつさのせいではない、ある種の熱が少年を苛む——。

そこはこじんまりとした風情の露天風呂だった。少年が浸かっている湯の真上には広々とした夜空が広がっており、湯けむりの間に間に夏の草木の匂いがする。珍しい濁り湯を堪能し、湯に浸かった客たちは皆気分よく星空を見上げている。

「どうしたんだい？ そんなに恥ずかしそうにして」

背後から耳元で囁かれ、びくりと少年の肩が跳ねる。

湯に浸かった状態でもでっぷりと太っていることがわかる、頭髪の薄い中年男。  
少年は彼の開いた脚の間に座らされていた。

「……っ！」

太い両腕に肩を抱きよせられれば、小さな尻の割れ目に硬いものが押しあたる。

「ふふ。気持ちのいい温泉だねえ。はるばる<sup>ふない</sup>府内から来てよかったね？」

唾液の音の混じる声で囁かれ、ぞわりと背筋が<sup>しな</sup>撓る。

男は少年の反応を愉しむかのように息で笑い、再び片手を湯の中に戻した。

「……っ……っ、あ…、だめ……♡、」

少年が眉根をよせ、僅かに首を振る。濡れ羽のような黒髪が湯面にぽたぽたと雫を落とした。か細い下肢の間から、焦れるような疼きが込み上げてくる。不透明な湯の中で男の手に擦られつづけた幼茎。そこはとつくに硬く芯を持っていた。

「声、ちゃんと抑えてないと周りにばれちゃうよ～？」

男は下賤な心を隠しもせず、少年の貝殻のような耳にねっとり囁きかけてくる。

「…う……、っ…あ……♡、はい……、<sup>おじ</sup>叔父さま……、」

目を快感に潤ませつつも、少年は従順に頷いた。この男には逆らえない。

数年前—…丁度明治の終わりに身寄りを亡くした少年は、東京府内の叔父の元に、幼いながら書生という肩書で住み込むこととなった。

それからというもの、片田舎の貧民だった少年の暮らしは一変した。充実した学業に高級な食事、質のいい着物。<sup>なりきん</sup>成金の叔父のおかげで、少年は何不自由ない生活を手に入れた。書生と言っても、それは実質養子のようなものだったのだ。

しかし——。親族の誰もが羨む華やかな暮らしの裏で、少年は叔父の魔の手に墜とされていた。

毎晩叔父は少年を闇に呼びつける。海外から取り寄せさせたというけばけばしい花蔦模様<sup>はなつた</sup>の西洋牀<sup>ベッド</sup>の上で、少年は純真な躰を調教された。夜毎に姦<sup>かん</sup>され、初めは苦痛のみを感じた少年の躰もいつしか淫らな快楽を覚え込まされていった。

最近では叔父の凶太い肉茎で後孔を拵げられ奥を突かれるだけで、前を触られずとも精を放つまでになった。少年の躰は絶えず叔父好みに作り変えられていく。

「もし僕との仲を他の人に喋ったら、そうだなあ。あれを君の通う学校にばら撒い  
ちやおうかな」

男は時折思い出したように釘をさす。

この言葉がある限り、少年はやはりこの男には逆らえない——。

「何考えてるの？」

首筋を撫ぜられ、びくっと躰が跳ねてしまう。

「うふふ。大人しくしててね」

粘つくような低い声色にうなじを這われ、少年はもう何度目になるかわからない  
嫌悪を感じ身を<sup>か</sup>振る。けれど男に弄られる幼茎は相変わらず硬い。どうかした拍  
子には嫌悪よりも快感のほうが強いような気がして、密かに乱れる息はどどん  
熱を帯びていく。

「おや。仲がよろしいですな。父子<sup>おやこ</sup>でご旅行ですか？」

ふと隣を見ると、人の良さそうな中年男性が湯に浸かっていた。

「ええ」

叔父は少年の股間を弄るのをやめぬまま、あくまでも自然に返事を返す。

「今日からしばらく仕事が休みなもので。この子をどうしてもここへ連れてきたかったんですよ」

「へえ。賢そうな坊ちゃんですね」

「……っ、」

急に視線を向けられて、少年の心臓がどきりと打つ。

緊張で全身がこわばったのを悟られぬよう、曖昧な笑顔を浮かべお辞儀する。

叔父が幼茎を擦り上げる速さがはやくなる。

「この子は私のところの書生でね。昨年府内の七年制〇×学校に通ってるんです」

「それはすごい！やはり優秀なんですねあ」

「…………っ、う…♡、」

叔父の手が烈しく陰茎を上下に擦るので、思わず喉奥から声が漏れてしまった。

叔父と男の視線が少年に注がれる。心臓が早鐘を打つ――。

「おや。もうのぼせたかい？あがろうか」

叔父は濁った湯の下で少年を舐りつつ、まるで何事もないかのように少年を覗き込む。少年は下肢をわななかせながら、慌てて首を左右に振った。

こんな状態で湯から上がるなどんでもない。少年は湯に入るにあたり、前を隠すための布すら持たせてもらっていなかった。

「そうかい。ならいいけどね」

「……っ、……………♡♡♡、」

叔父は少年の茎の先端部分を揉み込んでくる。

少年の前はとっくに膨張しきっている。もしここが湯の中でなければ、先端から透明な汁が<sup>した</sup>滴り竿をいやらしく濡らしていたことだろう。

「……………っ♡、っ♡♡、」

叔父は男と談笑し続けている。

けれどその右手は相も変わらず少年を追い詰める。

幼茎の先端を太い指の腹でぐりぐりと押し潰され、気まぐれに竿を扱かれる。厚ぼったくなった茎部をゆるゆると撫ぜるようにされたかと思うと唐突に強く擦られたり、裏筋の敏感な場所をわざと爪が当たるようにつつとなぞられたり――。

腰ががくがくするのを必死に抑える。

叔父の手を自らの手で阻害したくてたまらないが、そんなことをすれば後でどんな目に遭うかわからない。数日前少年は閨で叔父の許可なく射精した罰として、二時間も性玩具で後孔を責められ続けた。性玩具の形状はちょうど隣家の庭に生っていた<sup>な</sup>苦<sup>にが</sup>瓜<sup>うり</sup>のようで、男はそれを棒<sup>ぼう</sup>ずいきと呼んでいた。

棒<sup>ぼう</sup>ずいきのごつごつとした凹凸<sup>おとつ</sup>を思い出し、少年はぞっとする。強すぎる快感に身が焼き切れても男は折檻<sup>せつ</sup>だと言って何度もそれを少年のなかに突き入れてきた。じゅぽじゅぽとおよそ人体から発せられる音とは思えないような派手な水音が寝室を満たしても、少年が気絶するまで折檻はやめてもらえなかった。もうあんな思いはしたくない。

「君は、どうしてか知っているかな？」

ふと話しかけられたのだと気づき、少年は慌てて隣の男に顔を向ける。

一体何を聞かれたのだろう。叔父に与えられる淫楽を意識から追いやるのに必死で、全く会話を聞いていなかった。

「ほら、ここの温泉はなぜこんな色をしているのかと聞かれたんだよ」

叔父は男の前で、優しい父親のような態度を崩さない。

しかし湯の中では少年の幼い茎をぐっと握り込んで、「絶対に相手にばれないように、けれどきちんと受け答えをしろ」と暗に命じてくる。

「あ……、ええと……、」

声が震えそうだ。暑さというよりは緊張のせいで喉がからからになっている。

うまく声を出せないでいると、叔父は少年のものを握り込んだまま親指の腹で先端を苛めはじめる。

「あ…♡、こ……、ここの温泉は……、たしか……鉄鉱泉っていうらしくて……、」

できるだけ端的で短い言葉を選びたいのに、下半身から襲い来る快感のせいで思考がまとまらない。体が今にもびくんッと大きく跳ね上がってしまいそうだ。必死に腰から下に力を込めるのだが、そうすると余計下半身に意識が集中してつらい。腰が揺れそうだ。

「水の中の…、鉄が赤っぽい茶色に……、っあ……っ♡、……っ！？♡♡♡」



少年は瞠目しかけた。

叔父が湯の中で唐突に少年の両ひざを抱え上げ、小さな尻の割れ目にいきり立った自身を突き立ててきたのだ。硬い肉の先端につつかれ、秘された菊門がひくりと収縮する。

「え…♡、えっと……、お……っ♡♡……っっ、！……！！♡♡♡」

ずぶ、とそれは窄まりを割り拓いてくる。

意外にも湯はそれほど入ってこないが、今問題なのはそんなことではない。

湯の表面には少し大きめの波が立ったくらいで、居合わせた男はいぶかしむ様子もない。

しかし、いくらなんでもこんなのすぐにばれて——。

「……ツツ！！！！♡♡♡♡♡♡」

すんでのところで声を抑えた。

ずんっ、と一息に奥まで男根を突き動かされ、背筋がびりびりと撓<sup>しな</sup>る。

平静を装えたのは、およそ奇跡としか言いようがなかった。

媚肉の内側にみっちり埋まった、幹のようなそれ。少年にはあまりにも大きい雄茎が、慣らされもしていない肉洞をみりみりと押し拵げ圧迫している。

「……ツツ♡、……♡♡♡♡♡、」

肉洞は唐突に男を受け入れたにもかかわらず、悦ぶようにきゅんきゅんと収縮する。夜毎叔父に調教された躰は、あさましくも苦痛より淫楽をふんだんに拾い上げていた。

強い快感を打ち込まれながらそれをまったく<sup>おもて</sup>面に出せないだなんて、今にも気がおかしくなりそうだった。

公共の場で恥ずかしく脚を拵げさせられ尻孔を穿たれながら快感を得ている自分を目の前の男が知ったら、一体どう思うだろうか――。

そんな状況は想像するのさえ恐ろしくて、少年は必死に表情を取り繕う。湯で温まっているおかげで赤面していてもそれほど怪しまれはしないが、眼つきや口元だけは気を付けていなければどうにもならない。とくに勝手にだらしなく開く口元から、唾液やあられもない声が溢れてきそうに仕方がない。必死に口を引き結びつつも、自然な表情を浮かべるのに苦心する。それから――。

どうしよう。

先程頭に浮かんでいた言葉が全然でてこない。

自分は今、何をどこまで口にしたらろうか。

ずくんっ……、と一際大きく肉洞が疼いた。

もう耐えられない――。